ISSN 2189-8731

Kagoshima University International Center for Island Studies

島嶼研だより

No.92　鹿児島大学国際島嶼教育研究センター　2026年10月

主な記事

国際的な島嶼研究拠点形成に向けて （大塚　靖） p1
学生奮闘記「闘牛文化を学びに徳之島へ」（別頭叶絵） p3
フィールドこぼれ話「フィールドワーカーへの誘い」 (河合　渓） p8
連載　世界島めぐり　第十五回 「ヘイマエイ島　ヴェストマン諸島」(嶋野岳人) p9

国際的な島嶼研究拠点形成に向けて

大塚　靖
（国際島嶼教育研究センター）

国際島嶼教育研究センターは、1980年に南方地域総合研究センターとして発足して以来、名称や組織を変えながらも、常に島嶼研究の中核的拠点として活動を続けてまいりました。設立当初からオセアニア海域を中心に、練習船による水陸総合学術調査を実施するなど、現地で直接情報を得る実地調査と、現地研究機関との国際交流を重視してきました。また、外国人客員研究員制度のもとで、多くの海外の島嶼研究者が当センターで研究活動を行ってきました。

長年の蓄積が近年大きな成果として実を結んだのが、2021年度から2023年度にかけて実施した日本学術振興会（JSPS）の研究拠点形成事業「アジア島嶼域における人と自然の『共生』に関する研究拠点形成」です。本事業では、生物と社会の多様性で注目される奄美群島での研究実績を基盤に、マレーシア・サバ大学、フィリピン大学ビサヤ校、インドネシア・パティムラ大学との新たな国際ネットワークを構築しました。掲げた目標は、国際研究交流拠点の形成、若手研究者の育成、そして新たな学際的学問「島嶼学」の構築の三つです。遠隔講義システムを活用したセミナーや各地での野外実習プログラムを通じて、東南アジアの大学との間に強固な信頼関係と共同研究体制が築かれました。

このネットワークをさらに発展させるため、2025年度は経営戦略経費事業「奄美群島を中心とした国際共同研究・国際交流の推進」を展開しました。その中心となったのが、2025年11月に奄美分室で開催した「第12回東アジア海洋文化フォーラム」です。日本、台湾、中国、韓国などから研究者が奄美に集い、多国間での活発な学術交流が行われました。

このフォーラムには、サバ大学、フィリピン大学、パティムラ大学の研究者にも参加いただき、研究拠点形成に向けた助言をいただきました。パティムラ大学からは、年に一度のフォーラムで集まる「出会いの場」から、年間を通じて共同研究が動く「協働の仕組み」へ移るべきだという提言を受けました。フ

ォーラム後に共同研究の申請や特集号の企画に取り組む作業部会を置くこと、パイロット研究を支える小規模な研究資金を設けること、協定締結や受入れ手続きを一括して支援する窓口をセンターに置くことなど、きわめて実務的な提案でした。フィリピン大学からは、日本、インドネシア、マレーシア、フィリピン、韓国の大学による島嶼研究コンソーシアムを結成し、大学院生の共同指導や単位互換にまで踏み込むべきだとの提案がありました。あわせて、奄美分室に滞在する海外研究者には、許可手続きや移動、宿泊への支援が欠かせないとの指摘も受けました。サバ大学からは、研究データを国際的に共有するデジタル基盤の整備や、若手研究者を招へいするフェローシップの創設を求められました。いずれも、本センターを国際拠点に育てようとする仲間からの言葉です。外からの目は、私たちの強みとともに、取り組むべき課題をはっきりと示してくれました。

フォーラムでは、センターの助言を受けて研究に取り組む地元の高校生が、その成果を英語で発表しました。フィリピン大学の研究者が、奄美の高校生との交流を「最も記憶に残る経験の一つ」と寄稿してくれたことも印象に残っています。

私たちの研究は、こうした国際交流を基盤としながら、島嶼社会が直面する具体的な課題の解決にもつながっています。例えば、奄美群島固有種である特別天然記念物アマミノクロウサギによるタンカンなどの食害への対策や、南西諸島固有種であるケナガネズミの生態と保全など、文理の枠を超えた多角的なアプローチで島嶼の持続可能性を探求しています。

2026年11月には、パティムラ大学で次回のフォーラムが開催されます。この会議は、今回いただいた実務的な提言を具体的な協働プログラムへと発展させ、東南アジアのパートナー大学とより強固な共同研究体制を築くための重要なステップとなります。

そして2026年度からは、「学内島嶼研究の海外連携および情報発信の強化」として取り組みをさらに発展させます。JSPS二国間交流事業などの大型研究費の獲得に向けた体制を整えるとともに、学内に散在する島嶼関連データを体系的に整理し、オープンサイエンスの理念に基づく「島嶼データベースシステム」の構築に着手します。

最終的に目指すのは、世界水準の島嶼研究ハブを確立し、データ化・公開された知見を「知のインフラ」として地域社会の教育、行政、産業へ還元することです。本センターは、これまでの歩みを受け継ぎながら、人と自然の「共生」という地球規模の課題に挑み続けます。太平洋・アジア地域の持続的な発展に向けて、新たな挑戦を続けてまいります。



写真　第12回東アジア海洋文化フォーラム（奄美分室にて）

学生奮闘記

闘牛文化を学びに徳之島へ

別頭叶絵
（鹿児島大学法文学部人文学科多元地域文化コース4年）

徳之島は、鹿児島からフェリーで約15時間の場所にある。筆者の卒業論文の調査対象は、この島に受け継がれる闘牛文化だ。文化人類学では、現地での参与観察が欠かせず、調査を受け入れてくださる方がいなければ研究は成り立たない。そのため、現地へ向かうまでは本当に調査を始められるのだろうかという不安でいっぱいだった。

ところが、実際に徳之島を訪れるとその心配はすぐになくなった。牛を飼っている方も、そうでない方も、たくさんの方々が温かく迎え入れてくださったからだ。調査を通じたご縁は徳之島だけにとどまらず、徳之島と同様に闘牛文化が根付く沖縄にも広がった。3月に調査を始めてから現在（7月）までに、徳之島と沖縄で4回の現地調査を行い、夏休みにも長期滞在する予定だ。

友人から「どうしたらフィールドワークがうまくいくのか」と尋ねられることがある。しかし、現地調査が順調に進んでいるのは決して筆者の力ではない。島で出会う方々の温かい支えがあるからこそ、充実した調査を続けることができているのである。

もちろん、失敗もあった。１回目の調査では、港へ向かったものの、フェリーが欠航していて乗れなかった。また、宿の予約確認が不十分で泊まる場所を確保できなかったこともある。そのとき助けてくださったのが、お世話になっている牛主さんのお母さんだ。筆者がおばあちゃんと呼んでいるその方は、「うちでよければ泊まってね」と声をかけてくださった。それ以来、お言葉に甘え、おばあちゃんの家に泊まりながら調査を続けている。

調査を重ねるうちに、徳之島での暮らしにもすっかり慣れてきた。朝はおばあちゃんの家の前の自動販売機で牛主さん用のコーヒーを買い、牛舎へ向かう。牛に草を与え、牛舎を掃除した後、おばあちゃんの家に戻って朝食を食べる。夕方になると、仕事を終えた牛主さんと牛の餌となる草を刈り取り、牛舎での作業が一通り済んだら、一緒に夕食を食べに行く。天気の良い夜には、おばあちゃんと夜空を見に行ったり、アマミノクロウサギを探しに出かけたりする。その道中でハブを捕まえることもある。天気の悪い夜には、昔の闘牛大会のビデオを見る。そして、休日には牛主さんに島を案内していただいたり、サーフィンを教えていただいたりする。こうした日々を過ごすうちに、徳之島や沖縄は、いつの間にか筆者にとって第二の故郷となっていた。

卒業論文を書くために始めたフィールドワークだったが、筆者が得たものは調査データだけではない。島で出会った皆さんとのご縁こそが、筆者にとって何よりの財産である。卒業論文が完成した後も、このご縁を大切にし、徳之島や沖縄の皆さんとのつながりを大切にしていきたい。

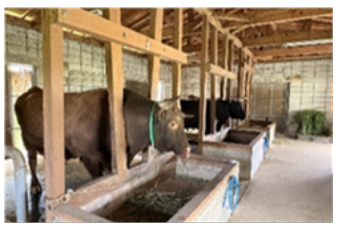


写真１　牛舎の様子



写真2　前祝いの様子



写真3　草刈りの様子

国際島嶼教育研究センター研究発表要旨

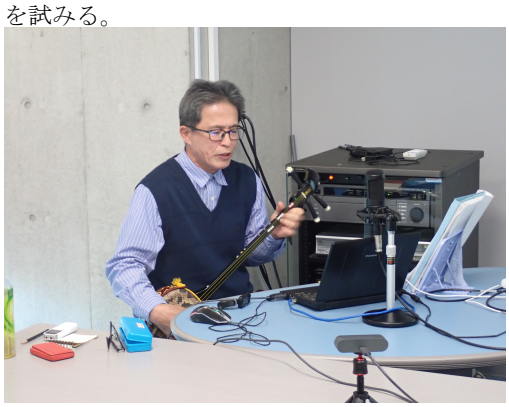
第257回　2026年4月27日

奄美シマ唄の音階と音についての考察

福山尚史
（奄美郷土研究会）

奄美大島のシマ唄を聴いていると普段馴染んでいる音楽の音階には存在しない音程の音が現れることがある。西洋音楽でいうところのドレミファソラシド、♭♯の半音といった12個の音を積み重ねてできた音階を私たちは当たりまえの音としてとらえている。誤解を恐れず解りやすく例えるなら、レ♭とレの音の間のエリアに無数に存在する音程の音のことである。奄美の祖先は唄の中でこれらの音を操り感情表現を行ってきた。これが奄美シマ唄の姿である。長い年月の中で世界でも珍しい独自の音階を創造してきたのである。これらの音をエリア音と呼ぶことにする。

今回の調査で、400年前にエリア音使用の可能性をみつけた。奄美の祖先がエリア音を好んだことにより八月踊り唄からシマ唄音階が生まれたこと、そして琉球弧において沖永良部島以南と徳之島、奄美大島（喜界島含む）の民謡における音階が分岐したことの説明が成り立つ。日本の伝統音階は、歴史的にユーラシア大陸の影響を受けながら形成されてきた。一般的に律音階、民謡音階、都節音階、琉球音階といった5音使用による四つの音階に大別される。これらの音階と比較しながら奄美シマ唄の音階と音の成立ちについての考察を試みる。



福山尚史　氏

第258回　2026年5月18日

島の生業と水産業

乾　政秀
（㈱水土舎）

島は海に囲まれ隔絶していたから、自給自足的生活が基本であった。海からもたらされる水産資源は貴重な動物タンパク源であり、場合によっては重要な現金収入源でもあった。ただし天然の良港がなく、漁港整備が遅れていた島では、宮本常一が「海に背を向けた島」と評したように水産資源を自らものにできなかった島も少なからず存在し、農業に大きく依存した島もある。

こうした地理的条件から島の生業は半農半漁であった。石材や石炭を採掘する鉱業、迷惑施設ともいえる精錬業、海運業、造船業、観光業などに大きく依存する島も見られたが、観光業を除くと現在はいずれの産業も斜陽であり、島の社会経済を支えているのはいまなお１次産業なのだ。

高度経済成長を境に貨幣経済化が一層顕著になると、島の農業は換金作物へと転換、一方漁獲物はすぐに換金できたから漁業への依存度が増していく。こうした対応が難しかった島では人口の流出が加速していった。

島の周辺海域は、基礎生産力が高く、複雑な海底地形と長い海岸線は多様な水産資源を育んできた。島はわが国の漁業生産の１割以上を担う重要な役割をはたしてきたのである。しかし今日、島における漁業就業者の減少が顕著で、かつ温暖化を中心とする海の環境変化が重なり、島の水産業は大きな岐路に立たされている。



乾　政秀　氏

第259回　　2026年6月29日

島嶼地域における文化遺産防災マップの活用

佐藤宏之
（鹿児島大学教育学部）

近年多発する自然災害により、公的に指定された文化財のみならず、民間所有の歴史資料を含む多様な「文化遺産」の被災が相次いでいる。これらの資料は、地域の人びとの営みの証跡であり、いわば「地域の履歴書」とも呼ぶべき貴重な存在だ。しかし、いまだ調査が行き届いていない歴史資料は、全国に数億点存在すると推定されている。

このようなリスクに対応するため、文化遺産の位置情報と最新の災害情報を統合した「文化遺産防災マップ」を構築し、発災直後から被害を迅速に予測・推定する救済手法の研究開発に取り組んできた。

本報告では、同マップを活用して被災した文化遺産の総数や被害状況を迅速に推定し、救済活動を効率化するアプローチについて紹介する。これに懿徳天皇の御宇（BC510～477）の開聞岳湧出から慶応3年（1867）5月の大雨・洪水までの鹿児島県内で発生した災害（噴火・地震・干ばつ・飢饉・大雨・洪水・大風・竜巻・土砂災害・津波・高潮）と被災地を可視化した「鹿児島県歴史災害マップ」を重ね、社会に潜在する災害リスクを可視化する。さらに、文化遺産防災マップとハザードマップの重ね合わせにより、平時における災害リスクを可視化することの有効性についても論じたい。



佐藤宏之　氏

第260回　　2026年7月27日

「今、居る場をおもしろがる」ことから始まる地域づくり―新人保健師としての“わたし”が見出した、持続可能性への創発的アプローチ

森　隆子
（鹿児島大学医学部保健学科）

島嶼は、限られた空間の中にも人間生活と環境との緊密な相互作用、および固有の歴史や文化（ライフの営み）が凝縮されている世界である。少子高齢化や単身世帯の増加が顕著に進む与論町もまた、地域全体で暮らしを支え合う仕組みづくりが急務となっている。このような島において、専門職としての「よそ者」がいかに地域に溶け込み、持続可能な協働関係を築くことができるか。本発表では、地域包括支援センターに赴任した新人保健師の約3年間にわたる実践を通じ、島嶼における「創発的なまなざし」の意義を検証する。当初10か月の予定であった島暮らしの中で、あらかじめ正解（概念）を組み立てるのではなく、日常の観察と対話を繰り返す「探索」と「小さな蓄積」を基本姿勢とした。公私を緩やかに越境しながら場に深く浸ることで、時に生じる葛藤やジレンマさえも創造の糧へと転換する身体性が培われた。そのプロセスを通して、住民の日常生活に根差した（埋め込まれた）創造性や相互扶助の姿が可視化され、人と人、暮らしと暮らしの関係性を編み直す「創造的な場」の醸成へとつながった。今、居る場をおもしろがり（好奇心と細やかな

関心）、小さな気づきを積み重ねるプロセス自体が、過疎化や高齢化に直面する島嶼コミュニティの持続可能性を高め、ひいては柔軟な人材を育成する環境そのものを創り出す契機になり得ると考える。



森　隆子　氏

第261回　2026年9月28日

旧石器時代の種子島

寒川朋枝
（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）

本発表では、種子島地域における後期旧石器時代の特徴について述べる。また、周辺地域や近年増加している琉球列島における調査成果にも触れ、現状での各島嶼部における文化的特徴の概略について述べる。

中種子町立切遺跡、南種子町横峯遺跡は、後期旧石器前半期の約35000年前頃の種子島最古の人類の痕跡が認められる貴重な遺跡であり、2022年には国指定史跡として指定された。立切遺跡では陥し穴遺構や礫群といった遺構が検出されている。また多くの礫石器が出土していることも特徴であり、発表者はそれら遺物の残存デンプン分析を行い、植物質食糧が加工されていたことを示した。類似する状況は指宿市西多羅ヶ迫遺跡でも確認されている。

後期旧石器前半期以降の種子島地域で石器群が認められる時期は、現時点では後期旧石器時代末期の細石刃石器群の時期になる。正確な年代データが不足しているが、恐らく1万年ほどの空白期間が存在している。一方、沖縄以南については近年の発掘調査成果から継続的な人類活動が確認されており、各島嶼部での適応戦略を示している可能性がある。



寒川朋枝　氏

第262回　2026年10月19日

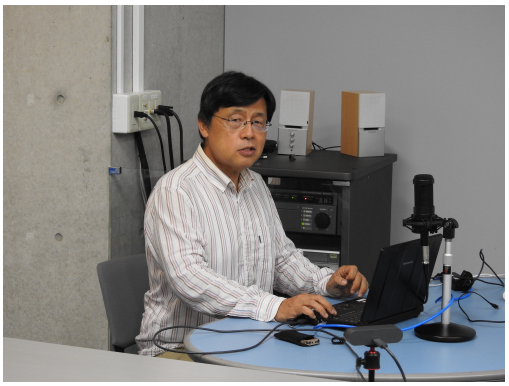
南海トラフ地震津波避難対策特別強化地域における避難施設・場所の調査並びに与論島における自動車を用いた地震津波避難訓練の紹介

柿沼太郎
（鹿児島大学学術研究院・理工学域）

東日本大震災以降、津波防災への関心が高まり、津波発生時に一時的に避難する施設の整備がより一層進められてきた。2021年4月までに、津波避難タワーは、23都道府県で502棟が整備され、また、既存の建物を避難場所として活用する津波避難ビルは、37都道府県で15,304棟が登録されている。これらは、東日本大震災発生前の、それぞれ、約11倍および約8倍の数である。ところで、災害対策基本法において、津波避難タワー、津波避難ビルや、指定緊急避難場所は、指定避難所と同じく市町村長が指定することとなっている。したがって、これらは、各市町村の実情に応じた整備が可能である反面、市町村や避難場所ごとに、指定数や防災機能の差が見られる。また、防災機能および備蓄品やバリアフリーに関する充実度にも、市町村や避難場所によって差が生じている。さらに、避難場所周辺の道

路に対して、案内サインや街灯の設置に関する明確なルールがない。そこで、本研究では、内閣府によって南海トラフ地震津波避難対策特別強化地域に指定された139市町村における津波避難ビル、津波避難タワーおよび指定緊急避難場所の指定数と、津波到達時間や浸水面積といった一時避難において重要と思われる項目との関係に関して検討した。また、鹿児島県東串良町および肝付町を対象として、津波来襲時の一時避難に対する津波防災対策の詳細を調査し、両町の取り組みの現在位置を示してから、今後必要な対策を考える。

　また、2025年2月に、鹿児島県大島郡与論町において、清水建設、鹿児島大学および与論町が住民の協力のもと、自動車による津波避難訓練を実施した。講演では、これに関しても紹介する。



柿沼太郎　氏

～フィールドこぼれ話～

フィールドワーカーへの誘い

河合　渓（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

大学3年の時に、4年生から所属する研究室を選ぶことになり、どの研究室に所属するか迷った。体を動かすことが好きだったので、野外調査で得たデータを扱う生態学が自分に合っているのではないかと考えた。所属していた学科には、生態学に関連する研究室が2つあった。淡水魚を対象に集団遺伝学を研究する研究室と底生生物を対象に個体群生態学を研究する研究室のうち、広い海で調査することに魅力を感じて後者を選んだ。

4年生になり、船外機付きの小型船で湾内の底生生物を毎月採集した。採泥機を海中に投入し、2人でロープを引いて船上に引き上げる。60地点での採集は重労働だったが、船上での振る舞いや調査方法を身につけた。また、卒論のテーマがサクラガイの生殖周期と成長であったため、湾内の環境を毎月直接感じられたことは、サクラガイの生態にみられる季節変化を考察するうえで大いに役立った。

大学院生の時は、潮間帯の貝類の生活史を研究した。調査を行うのは干潮時で、1日に2回ある干潮のうち、夏場は昼間に潮が大きく引くが、冬場は夜中に大きく引く。北海道の真冬、激しく雪が降る真夜中の調査は、なかなか過酷だった。しかし、日常的に野外で貝類の生態を観察し、生息環境を肌で感じたことは、生活史を解明するうえで非常に重要であった。野外調査を通して、観察し、記録し、考察する力を養うことができた。

鹿児島に就職し、せっかく暖かい海のある地域に来たのだからと思い、ダイビングの技術を習得し、海中で調査を始めた。美しい海を眺めながらの調査は、新たな喜びを与えてくれた。多様な生物の興味深い行動に出会うこともあれば、じっくり観察するうちに、それまで疑問に思っていたことを解くアイデアが浮かぶこともあった。

最近は野外調査をしたい学生が減ったと聞く。野外調査の楽しさを知る前に「きつい、汚い、危険」というイメージが先行しているからかもしれない。近年は気候変動の影響もあり、自然環境は少しずつ変化し、それに応じて生物の生態も変わりつつある。こうした変化を把握し、その影響を考えるためには、日常的に野外に出て、自分の目で観察することが欠かせない。フィールドワーカーは、自然環境のわずかな変化を身近に感じ取ることができる。今こそ、フィールドワーカーが必要とされている。なにより、野外には、実際に足を運んだ者だけが味わえる発見と喜びがある。



写真1 フィジーでの野外調査

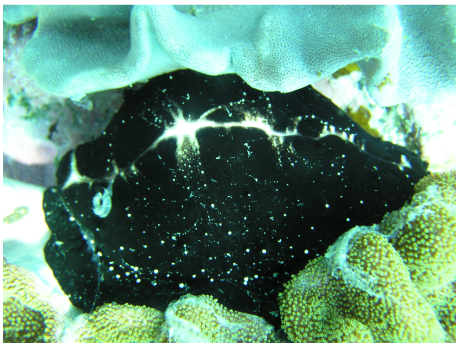


写真2 潜水調査で観察したウミウサギガイ

「世界島めぐり」

第十五回 ヘイマエイ島　ヴェストマン諸島
（Heimaey Island, Islands, Iceland）

嶋野岳人（大学院理工学研究科地球科学PG）

我が国と同じ火山国・島国のアイスランド本島の南に浮かぶヘイマエイ島は、ヴェストマン諸島に連なる唯一の有人島であり活火山である。半日もあれば歩いて一周できる島の北には天然の良港があり、アイスランド水産業の重要な拠点となっている．1973年にはマグマを噴き上げる噴火がこのすぐ近くで発生し、噴出物は2日ほどで標高100mを超える山を作った。町や港には溶岩流による埋没の危機が迫った。多くの家屋は噴出物の下敷きになったが、島民は島中の消防車やポンプを集め、放水によって溶岩流を冷却・停止させ港を死守した。現在もこの港は重要な島の玄関口であるが、飛行機を使えば首都レイキャビク空港からは30分ほどで行くことができる。たくさんの海鳥たちが飛び交う島でもある。



図１アイスランド（挿入図）南方に続くヴェストマン諸島とヘイマエイ島



写真1　湾内から眺めた町と左手から迫った溶岩（2008年8月21日撮影）



写真2　1973年噴火でできたスコリア丘から見た溶岩と港町（2008年8月21日撮影）



写真3水冷による節理の発達した溶岩からなる海食崖に巣作りした海鳥

編集後記

　奄美大島では食材がフェリーで輸送されてくるため、台風の多かった今年の夏秋では、フェリーの運航が中止になることが多く、スーパーの棚がよく空になりました。今週も台風30号の影響でスーパーの棚が空でしたが、やっとフェリーが運航され、今朝荷が届いたと思います。日々の生活の中で、流通の大切さを改めて感じます。（KK）

島嶼研だより　No.92　令和8年10月31日

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
〒890-8580　鹿児島市郡元1-21-24
電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197
電子メイル　shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp
WWW http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html